

第1回FD勉強会「理工系科目におけるIT利用による学習支援」(5月25日)

今年度第1回目のFD勉強会では、学生の学修を担保し「単位の実質化」を図る上で必要とされる効果的な学習支援法の具体を探るため、「IT利用による学習支援」をテーマに掲げ考察を深めました。

知識の獲得のためには授業時間内での学修のみならず、事前・事後学修での「既習知識との関係づけ」「振り返り」による積み上げと深化が不可欠です。しかし、このように事前・事後学修を考慮しながら15回の授業を緻密に設計したとしても、学習支援のための直接的な働きかけが授業時間内に限定されている状況では、その効果に限界がありました。



ワークでは学び語り合う楽しさを実感

今回のFD勉強会では、このような授業の現状を解決するためにITの活用にどれだけ期待が持てるのか、本学で最も利用者が多く汎用性も高いmanaba folioとmanaba courseを例として、3名の教員より報告をいただきました。概要は以下のとおりです。

■日時・場所 5月25日(金) 16:40~18:10 K3号館3602教室

■参加者 14名(C1, I3, D2, R1, B1, L1, U1, K3, T1)

■概要

第1報告:「manabaシステムの概要」 西口磯春(情報メディア学科 教授)

- ・ 本学の教育環境でのITを利用した授業の限界について
- ・ manaba folio、manaba courseと本学独自システムであるKBookの導入背景と概要
- ・ manaba folioのクリッカー機能の用例
- ・ manaba courseの小テスト機能の用例
- ・ ホームエレクトロニクス開発学科でのmanaba folioレポート・掲示板機能の用例
- ・ 栄養生命科学科でのmanaba courseのeドリル機能を用いた国家試験対策教材の開発

第2報告:「ITを利用したブレンド型授業の事例紹介」 神谷克政(基礎・教養教育センター 准教授)

- ・ 対面授業が基本となる15回の授業において、いかなる局面でIT利用が可能なのか
- ・ オンライン宿題の特長とその出題方法
- ・ manaba course上でオンライン宿題を取入れた授業の流れと学習効果

第3報告:「eドリルの実践と作成における注意点」 土谷洋平(基礎・教養教育センター 准教授)

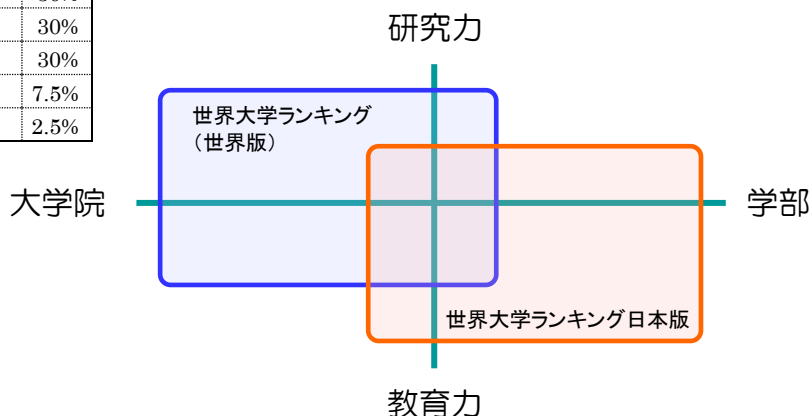
- ・ manaba courseのeドリル機能は学生の考える力の養成を促進するツールとして有効
- ・ eドリル「虫食い算」の学習体験をとおした学習にまつわる認知的問題への気づき
- ・ 授業設計において、認知論を基本に学習への働きかけを意識していくことの重要性

報告をとおして窺えたのが、オンライン学習を組み込んだ際の学生・教員双方での、学習・教育上の利点でした。学生の立場では自己の生活サイクルにあった学習の機会を得ることができ、適切なアドバイスを得ることで生涯に向けた学習習慣確立の礎を作ることができます。また、教員の立場では、「事前学修/事後学修」時間と対面授業の構成を戦略的に設計できるようになり、知識の定着と深化に向けた教授・学習活動に幅を持たせることが可能となります。

大学設置基準では、1単位時間あたり45時間の学修時間を求められますが、学生の学修を形骸化させず真の学びを担保する上で、ITの利用は必然的に求められていくのかもしれない。

昨年度 10 月、THE 世界大学ランキング発表時に「Times Higher Education 第2回大学改革カンファレンス」が、3月には世界大学ランキング日本版 2018 発表当日に「Times Higher Education 大学改革カンファレンス 2018」が開催されました。以下、3月のカンファレンス 2018 を中心に概要を報告します。

世界版 分野	%
教育力	30%
研究力	30%
研究の影響力	30%
国際性	7.5%
産業界からの収入	2.5%



日本版 分野	%
教育リソース	34%
教育充実度	26%
教育成果	20%
国際性	20%

「大学ランキングの活用補法を考える」(2017.10 第2回大学改革カンファレンス資料)より

- ◆ 世界ランキング（以下「世界版」とします）が「研究力」重視であるのに対して日本版は「教育力」を重視しています。そのことから、評価の軸足が世界ランキングでは大学院に、日本版では学部にあります。
- ◆ 世界版では、同一項目で異なる国々の大学を評価することから、国によって異なる教育満足度のありかたなどは評価が困難であり「研究力」重視でした。そこで「教育力」を重視した国別ランキングが設定されることとなり、最初にアメリカで、次いで 2017 年に日本版が作成され、今回、日本版の 2 回目が公表されました。
- ◆ 日本版は日本国内だけでなく世界に配信されます。

1 Times Higher Education 大学改革カンファレンス 2018 の内容

日時・会場・主催	2018.3.28 13:00～17:40 ベルサール新宿グランド Times Higher Education / ベネッセコーポレーション
第1部 基調講演「これからの日本の大学に求められること」	
講師	文部科学省 大臣補佐官 鈴木 寛 氏
要点	① 若年人口減少により大学入学易化、大学経営難化。世界的には若年人口増加でありステークホルダー拡大が必要。日本の大学の国際競争力は、授業料の安さ、就学ビザの獲得しやすさが強みで、特にアジアからの留学生が増加した。「ODA 的な留学生受け入れは卒業してよい。」 ② 世界版で東京大学の順位が下がったことが報道されるが、ランクイン校は増加した。 ③ ランキング結果に右往左往するのではなく、大学改革のための有効活用が求められている。また、質の高い多様なカリキュラム充実のため大学間協働を進める必要もある。
第2部 ランキング発表「THE 世界大学ランキング日本版 2018 の詳説」	
講師	THE Global データ解析ディレクター Duncan Ross 氏 THE ディレクター Nick Pirog 氏
要点	① 日本版のねらいと、世界版との評価指標の違い。 ② ランキングへの周知度が高まり、留学先決定や提携相手決定に活用されている。 ③ 日本の大学改革は進んでおり、ランクイン大学が 69 校から 89 校へと増加した。
第3部 情報提供「概要説明と『大学におけるランキングの活用』について」	
講師	ベネッセコーポレーション、進研アド
要点	① ランクインのための大学改革ではなく、ランキングを利用、活用してほしい。 ② 世界版や日本版でランクインしている大学の方策、事例の紹介。

2 カンファレンスの内容に関連する補足

(1) 日本版 2018 の性格

ご承知のとおり、世界版は5分野13指標項目により、日本版2018は4分野13指標項目により構成され、世界版では5つの分野の中の1つが「教育力」であるのに対して、日本版には「教育リソース」、「教育充実度」、「教育成果」の教育3分野が設定されています。日本版の残る1分野は「国際性」であり、世界版と共通の分野です。日本版2018では、日本版の初年版である2017に比して、分野「教育リソース」の指標「教員一人あたりの競争的資金獲得数」の割合が7%から5%に下げられ、分野「国際性」については指標の見直しにより、指標「日本人学生の留学比率」と「外国語で行われている講座の比率」が新たに加わり、分野「国際性」の割合が16%から20%に上げられました。

	世界版 2018	日本版 2018
ランクイン	<ul style="list-style-type: none"> 世界の大学を対象、1,102校ランクイン 日本の大学は89校がランクイン 	<ul style="list-style-type: none"> 日本の全大学を対象 総合、部門別ともに上位150校を公開
「教育」	<ul style="list-style-type: none"> 評価項目「学士課程学生に対する博士課程学生の比率」、「博士号取得教員の比率」は世界版のみ 	<ul style="list-style-type: none"> 項目「学生一人あたりの教員数」は双方 「大学合格者の学力」等、日本版のみにある項目が多い
「国際性」	<ul style="list-style-type: none"> 評価項目「国際共同研究」は世界版のみ 「国際性」についても「研究」重視 	<ul style="list-style-type: none"> 項目「外国人学生比率」「外国人教員比率」は双方 「外国語で行われる講座の比率」は日本版のみ

(2) 調査方法

調査方法		対象の指標項目
各大学が入力		「学生一人あたりの教員数」「外国語で行われる講座の比率」など
ベネッセ	高校進路担当教員	「高校教員の評判調査」
	総合学力テスト	「大学合格者の学力」
THE 大学ランキングから抽出		「研究者の評判調査」
日本経済新聞社の調査		「企業人事の評判調査」
エルゼビア社の調査		「教員一人あたりの論文数」

- ◆ 分野「教育充実度」は、「高校教員の評判調査：グローバル人材育成の重視」、「高校教員の評判調査：入学後の能力伸長」の2項目よりなり、高校の進路担当教員を対象とした調査によりポイントが付されています。2017年度調査では、ベネッセから5,450校に依頼、2,415校からの回答がありました。
- ◆ 分野「教育充実度」について、大学在学学生への満足度調査が行われました（今回のランキングでは反映が見送られました）。また、分野「教育成果」では「企業人事の評判調査」「研究者の評判調査」が指標になっていますが、今後「進路決定率」が新たな指標として検討されています。

- ▼ 世界版にくらべて日本版の注目度は、新聞等の扱いをみるかぎりでは低いようです。世界版について、日本の大学が世界の上位に位置しないことが多少の誇張も込めて報じられ、文科省鈴木大臣補佐官は「新聞は東京大学のランクが下がったことを取り上げ、ランクインした大学が増えたことは記していなかった」と語っていました。一方で THE の Duncan Ross 氏は「世界版にランクインした日本の大学が増えた」こと、しかし「世界版に登場する大学は一部である」こと、そこで「日本の大学の多様性と優れた点をアピールする目的で日本版を作成した」と、日本版作成の意図を明確にされました。
- ▼ 教育の現場においては世界版とともに日本版が気に掛かることになりそうです。とりわけ高校の進路指導は、若年層人口の減少とそのことに伴う進学希望者層の拡大により、高校によっては、「大学で何をしたいか」というような、進学目的を大切にする指導に変化しています（偏差値に依存した「どこなら合格するか」という指導もまだまだ健在ではありますが）。
- ▼ ランキングをおこなうことへの是非が問われないまま社会の求める大学像が独り歩きすることを危惧しつつ、指標となる項目への各大学の取組が今後さらに問われるのだろうと会場で思いました。

第1回・第2回 教育力向上ワークショップの開催（4月27日・6月1日）

昨年度の新採用教員を対象とした全4回のワークショップの内容を拡充し、今年度からは全8回の予定で、全学教職員を対象とする「教育力向上ワークショップ」を開催しています。

ここでは4月に開催した第1回目、そして6月に開催した第2回目のワークショップの報告を行います。

◇第1回「発達障害のある学生の支援」 寺島みどり（学生相談室カウンセラー）



自閉症スペクトラム (ASD)、注意欠陥多動性障害 (ADHD)、限局性学習障害 (SLD) の特徴と、大学で起こり得る学業面や対人関係での困難を整理し、事例を紹介していただきました。受講者は、シミュレーションをとおして、支援において留意すべき4点（特性・ニーズの確認、支援内容の妥当性と合理性、実行可能性、合意形成）の検討を行いました。

当日は、11学科4部署から、34名の教職員にご参加いただきました。

第1回ワークショップ アンケート集計結果

	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満
Q1テーマ・内容	18	8	2	0	1
Q2講師の資料	13	12	3	2	0
Q3WSの活動	13	9	4	3	0
Q4期待した知識	9	14	4	2	0
Q5自己の収穫	14	9	1	1	0
Q6活用可能性	12	8	6	0	0

第2回ワークショップ アンケート集計結果

	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満
Q1テーマ・内容	3	0	0	0	0
Q2講師の資料	3	0	0	0	0
Q3WSの活動	3	0	0	0	0
Q4期待した知識	2	1	0	0	0
Q5自己の収穫	3	0	0	0	0
Q6活用可能性	1	2	0	0	0

◇第2回「manaba 活用入門」 伊藤勝久（教育開発センター）・神谷克政（基礎・教養教育センター）

先述した第1回FD勉強会でmanabaの概要を理解し、授業でのIT利用に興味を持っていただいた皆さまが、活用法を習得できるよう本ワークショップを設定しました。前半は、manaba folioでの、「レポート課題」（フォーム入力、ファイル送信）と「評価シート」の利用について、そして後半はmanaba courseでの小テストの作成と自動採点の方法について、実際にmanabaを操作しながらステップごとに学習していきました。

残念ながら参加者が少ない研修会でしたが、学習者にとっては疑問に即座に答えが得られる良好な環境だったようです。本ワークショップの内容では、manaba folioの活用法についてオンデマンドで対応いたしますので、興味のある方はセンターにご連絡ください。

教育力向上ワークショップは、次回から3回に亘って「授業設計」をテーマとします。「目標・評価設定」「教授方法の決定」「教授内容の課題分析」と進んでまいりますので、授業の改善を考えている教員の皆さま、そして大学の授業の方法や考え方を学びたい職員の皆さまにも、是非ご参加いただけますようお願いいたします。

あとがき：教育開発センターでは、ほぼ毎月FD研修・勉強会を実施する予定です。最近実施したものを紹介しました。今後も随時報告する予定ですので、ご意見・ご感想をお願いします。そして参加もご検討ください。もう1つ記事にある世界大学ランキング日本版2018はWeb上で見ることができます。ランキング指標を参考に、高校生が大学を選択する流れも始まりつつあるようです。ぜひとも一度ご確認ください。（所長 井上哲理）

*問合せ先：教育開発センター（KAIT HALL 2F, edc@kait.jp） *バックナンバーはセンターホームページで。